

アン・ブロンテ研究ノート：作家のテーマと執筆の 目的

廣田，稔
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5495>

出版情報：言語文化論究. 11, pp.1-8, 2000-03-01. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

アン・ブロンテ研究ノート

— 作家のテーマと執筆の目的 —

廣 田 稔

アンは *Tenant of Wildfell Hall* の第二版序文の中で、彼女の信条の3点を披瀝した。それは先ず第一に本はその価値によって判断されるべきもので、作者の性によってなされるべきではない。第二には女性も男性同様に自分の描く場面を最も良く表現するどのような技巧と言語を用いる権利がある。そして第三にはすべての小説は男女が共に読むためのものとして書かれるべきである以上、女性作家も男性作家が取り挙げて書くような主題を提供する権利があると主張して、女性作家が「男性にとって適切でふさわしいものを書いたからといってどうして非難されねばならないのか」¹ まったく当惑を覚えてしまうと、世の女性作家蔑視に対する抗議を行っている。このような彼女の基本的な作家としての姿勢は、自ら観察し、蓄積した素材に対する率直で赤裸々な人物描写その他の中に表出されている。そこにはポープ流の人間にとって最もふさわしい研究は人間といった思潮、またオースティン流の人間の性格研究² への関心をもある意味で凌ぐほどの深刻な人間の実相の描出がある。彼女には兄ブランウエルの挫折し苦悩する姿が眼の前につきつけられていたという実人生の逃れようのない現実があったことが、作家としての彼女の生き方に大きな影響を与えていたことは疑いもないことである。そのような現実に立脚した作家としての自己主張でもあったのである。苦悩する人間をその泥沼から救い出さんがための自らの宗教的情熱の吐露も、オースティンの世界には見られない要素である。踏み迷い墮落した人間を救済せんがための道徳の書要素は、アンの小説の特異な部分として特筆すべきものである。こうした部分は男性作家に決して劣るところのない毅然とした態度で示し出されているが、そうした部分があまりにも赤裸々であるといったために世の批判を受けねばならないとしたならば、アンにとってはいかにも残念であったに相違ない。むしろ彼女にとっては自己の作品を通して世の人々に警告と助言を与えねばならないという、やむにやまない真情を理解してもらうことこそ重要であったと思われ、それがたまたま文学上の困襲への抗議に結びついたといえるのではないだろうか。

『ワイルドフェル・ホールの住人』は何よりも人間にとって誤ってなされた教育の結果が、罪と不節操へ導くことを骨身に知らされたアンが、兄ブランウエルの実例を通して世の人々へ警鐘を打ち鳴らさんがためのものであった。とりわけ当時飲酒に強いことが興味を持たれる社会的風潮によって、そのことが直接的に男らしさ、男性の逞しさとみなされたことが兄ブランウエルの窮極的な墮落の原因とアンは考えたのである。そしてその遠因となったのは幼児期からの誤った教育的訓練にあったのだと結論づけざるを得なかった。

男性たち自らアルコールを好むことが女性よりも優れた存在となるかのように見なし、

¹ Anne Brontë, *The Tenant of Wildfell Hall*, The Shakespeare Head Brontë Vol.1, 1989, p.xi.

² *Pride and Prejudice* (Oxford Univ. Press, 1967), pp. 42-43参照

男性性をより高めることになることを考えることからもたらされる弊害をアンは強く懸念し、そのことはどのようなことをしても正さねばならないと考えていたと思われる。そのような意識によって彼女の作品の主たる重要なテーマが生まれたことを『アグネス・グレイ』にも確認できる。例えば女主人公アグネスが家庭教師を勤める、ブルームフィールド家のトムは、動物に対する残酷な行為その他手に負えない子供であるが、そのような彼もワインやアルコールを飲めば飲むほど、男らしくなれると信じ込むような教育を与えられていることにアグネスはひどい衝撃を受ける。

作者アンは兄の状況を眼の当たりにした自らの経験によって、男の子への教育とその結果を身にしみて感じていたことは否定すべくもない。シャーロットの言葉によれば“terrible effects of talents misused and faculties abused”³という痛恨の思いによって創作へと突き動かされていたのである。これは勤め先のロビンソン家をブランウエルが解雇されて以来、アンが殆ど毎日観察せざるを得なかった状況であった。ロビンソン家への出入りを禁じられる手紙をロビンソン氏から受け取って以来というもの、ブランウエルは病的状態に陥り、酒に悲しみを溺れさせて、発作的な精神錯乱状態にまでなってしまう有様であった。⁴シャーロットにとっては、彼女が愛していた弟の状態に嫌悪感さえ覚えるものがあり、エミリとアンにとってもブランウエルによって引き起こされた心の動揺と不安は、彼女たちに大きな精神的打撃であったに相違ない。幼い頃からとりわけ宗教心の強いアンは、エミリと同様に兄の状態を心配しながらも愛情を持ち続け、二人は彼を看護しつつ、その狂乱の言葉に耳を傾けた。しかし絶望の底に沈もうとする兄の状態から彼を救い出したいという意志も強固なものとして彼女の胸の内に強められ、と同時に罪と飲酒との結果を作品の中にしっかりと留め置かなければならないという気持ちに駆り立てられていく自らを意識しなければならなかった。ブランウエルは過度の飲酒からアヘンにまで耽けるという救い難い泥沼に陥っていたのである。

ブロンテの一家が過ごした背景となるハワースとヨークシア地方ではアルコールを当然のこととして飲み楽しむ傾向と風潮がみなぎっていた。ギヤスケル夫人によれば、その端的な例として葬式の後の“arvills”と称される宴席が酔払った者たち同士の口論やけんか騒ぎで終わるといったこともしばしばであったのである。⁵そのような飲酒による大人たちの行状が、それ自体でそのような状況を見守る機会のあった子供たちに良い影響を与えろとは思われず、あまつさえ飲酒に強いことが女性に対する男性の優越性のシンボルであるかのように見なされていたのだから、当代英国の倫理的、道徳的規範は常規を逸していたとしか言い得ない。先に述べた『アグネス・グレイ』のブルームフィールド家にはこうした点を見事なまでに主張し、自らの主義とする尊大な人物で、子供たちのあらゆる悪癖の助長者となる、ロブソンという叔父の嫌悪すべき存在が描かれている。父親であるブルームフィールド氏もこうした叔父の態度に別に異議を唱えることもないのである。

Though not a positive drunkard, Mr Robson habitually swallowed great quantities of wine, and took with relish an occasional glass of brandy and water. He taught his nephew to imitate him in this to the utmost of his

³ Charlotte Brontë, Biographical Notice in *Wuthering Heights* (Penguin Books, 1982), p.34.

⁴ Lawrence and Elizabeth Hanson, *The Four Brontës* (Archon Books, 1967), p.170参照

⁵ Mrs. Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (London: J. M. Dent&Sons, 1960), p.15.

ability, and to believe that the more wine and spirits he could take, and the better he liked them, the more he manifested his bold and manly spirit, and rose superior to his sisters. Mr Bloomfield had not much to say against it, for his favourite beverage was gin and water, of which he took a considerable portion every day, by dint of constant sipping – and to that, I chiefly attributed his dingy complexion and waspish temper.⁶

ここに見られるように、父親も水割りのジンが大の好物で、それを毎日かなりの量を絶えずちびりちびりと啜っては楽しんでいたのである。アルコールを嗜むというようなことであるどころか、多分に中毒気味とも言えるのではないかと思われるのである。というのもそれこそが父親が顔色は黒ずみ、性格も怒りっぽいかんしゃく持ちとなっている主たる原因なのだとアグネスには思われるからである。

アルコールに対する嫌悪感は『ワイルドフェル・ホールの住人』ではなお一層強く打出される。それは作者の強迫観念であったかのように響くとしか言いようがないが、事実その通りでしかなかったと言えるであろう。ブランウエルの飲酒に原因する身の持ち崩しがいかに骨身にこたえていたのが察せられる。この物語の女主人公ヘレン（但し、この時点では Mrs. Graham として知られている）が小さな一人息子のアーサーを伴って始めてマーカム家を訪れた際にケーキとワインが出された時の場面を皮切りとして、深刻な飲酒議論が幾度となく描出される。この折、ワインだけはアーサーに取らせることを彼女はかたくなに拒絶する。マーカム夫人から、そのようなことでは彼は大変な意気地なしの男の子に成長してしまうことになるだろうと言われるのに対して、ヘレンは毅然としてそうすることによって彼を墮落させることになる悪徳から救ってやれるのだと答えるのである。アーサーがワインを飲むように強く促された時に恐怖と嫌悪の念でたじろいでしまうことに対してヘレンは次のように弁明する。

“He detests the very sight of wine,” she added, “and the smell of it almost makes him sick. I have been accustomed to make him swallow a little wine or weak spirits-and-water, by way of medicine when he was sick, and, in fact, I have done what I could to make him hate them.”⁷

この場面はヘレンとマーカム夫人とギルバート・マーカムとのアルコール飲酒の是非、とりわけ子供への影響、このことを契機としての子供の教育についての意見の相違からくる論争へと発展する。ヘレンの主張は明らかに作者アン自らのものであり、一方マーカム夫人とギルバートの意見は当代一般に行われていた慣習や考え方を代弁するものである。この論争のなかに作者自らの当代の風潮に対する確固とした批判の主張が読み取れる。

ギルバートはヘレンとの議論の中で、ヘレンの心の中の葛藤、彼女が何故そのような主張をなさねばならないかその理由の背景を十分に理解できる状況ではない。飲酒に溺れ救い難く墮落したこの少年の父親からこのいたいけな我が子を護るためにも、また父親の轍を踏ませて悪徳のふちに沈むきっかけを作るようなことは決してなしてはならないという母親の決意を理解できる立場におかれていないのである。こうした状況の上で立つての議論が進行していくために、ヘレンの主張が十分に理解されず彼女への誤解や偏見を生む土

⁶ Ann Brontë, *Agnes Grey*, Ch. 5.

⁷ Ann Brontë, *The Tenant of Wildfell Hall*, Ch. 3.

台が自然に生まれている。マーカム夫人とギルバートは当代ヴィクトリア朝の物の考え方を示し、当代の男の子の教育についての最も基本的な観念を一見さりげない日常の偶然の会話の中に表出し、その観念の倫理的欠陥を突き崩しても自己の信ずるものを死守せんとするヘレンとの対峙関係の構図は、双方の立場を明確にする点でそれなりの効果を生み出している。作者の意図した社会への警告の書となるべき要素としての主題の提供をより容易となす一手立、小説技法としての特徴であると言えよう。

ギルバートは男の子に誇らしくこの世界を歩かせようと思うのなら、行く手から石ころを取りのけるようなまねはせず、しっかりそれを踏みしめさせねばならない。手を引っ張っていくのではなく、一人で行くことを学ばせねばならないと主張する。それに対してヘレンは子供が一人歩き出来るようになるまでは手を引いてもやれば、行く手から多くの石を取り除く積りだと述べて、真向うから反対の論議を行う。人類全体が人生の過程つまづいたり大失敗をして落とし穴に落ち、行く手にあるあらゆる障害に向うずねを折ったりする時、もっと滑らかで安全な道を保証するために及ぶ限りの手段を使わない訳にはいかないと。ギルバートはそれはそうではあるが「最も確かな手段は誘惑に対して子供を力づけるようにすることで、誘惑を行く手から取り除くことではない」⁸と論じて両者は意見を異にする。マーカム夫人も自分が子供を教育できると思うと大間違いで、そう思い続けるなら災いがなされた時こそ大変後悔することになるのだと言う。まるで女の子のように扱えば精神を甘やかすばかりであると論ず。ヘレンはギルバートの意見を確かめるように、問いたです。

「マーカムさん、あなたは男の子は悪から護られるべきではなくて、それと戦うように一人で助けもなくて送り出されるべきだと主張なさるの？人生のワナの避け方を教えられているのではなく大胆にその中に飛び込むか、乗り越えるかするものだと。危険を避けるよりも危険を求めて誘惑によって美德の糧にすべきだとおっしゃるのよね。」⁹

これに対するギルバートの反論。

「…あなたはあんまり早計に過ぎますよ。僕は男の子が人生のワナに飛び込むように教えられるべきだとか、それを乗り越えることによって美德の行使を行わなければならないために、故意に誘惑を求めることすらすべきだなどとまだ言うてはいません。——僕が言っているのはただ、敵を無防備にして力を弱めるよりもこちらの防備を固め、強めたほうが良いのだと言っているだけです。——そしてもしもかしわの木の苗を昼も夜も入念な心を配って、風にも当たらないように覆いをかけてやりながら、温室の中で育てるようなことをしたとすれば、すべての自然の力にさらされながら、嵐の衝激からも身を護られることもなくて山腹に育っているような、遅い木になることを期待することなどできないだろうって。」¹⁰

以後二人の議論は続いて、男の子の場合にはそのようなことが言えるとしても、女の子の場合はどうなのかということに進んでいく。ヘレンはギルバートが女性について以下のように考えているに違いないと言うのである。

「あなたは女の子は本質的にとても邪悪であるか、とても意志の力が弱いので、誘惑に耐えることができないと考えていらっしゃるに違いないのだから。——そして女性は何も知

⁸ ibid., Ch. 3.

⁹ ibid., Ch. 3.

¹⁰ ibid., Ch. 3.

らず抑えられている限りは純粹で、無邪気であるかもしれないけれど、それでも、本当の美德というものを欠いているので、罪を犯すやり方を教えられたなら、たちまち罪人になってしまう。そして知識が増せば増すほど、自由さが広まれば広まるほど、その墮ちていく深みは深くなると。——ところがもっと気高い男性のほうはより優れた忍耐によって護られて善に向かう天性を備えているので、その天性は試練や危険が及べば及ぶほど、ますます育っていくのだと。——」¹¹

ギルバートはたまりかねて「そんな風に僕が考えているなどんでもない」とヘレンを遮って言う。しかしとにかく二人の議論は一向にかみ合わぬまま、二人は決別する。彼は「女性が自分と意見を異にする議論に耳を傾けようとした時は、前もってそれに抵抗しようとはあらかじめ決意しているのであって——体の耳では聞いても知的器官をどんな強い論議にも断固ふさいでしまうのだ。」¹²と結論づけてしまう。

それから数日を経てマーカム夫人が牧師のミルワード氏に、ヘレンが飲酒について述べたことを逐一話して聞かす場面において、マーカム夫人がヘレンの考えが間違っているのではないかと意見を求める際のミルワード牧師の反応に、聖職者の言葉とは思われぬ程の独善的な主張を聞くことになる。

「間違っている」…「犯罪と言わせてもらおう——犯罪と。——あの子を馬鹿にしたというばかりでなく、神の贈物を侮蔑したばかりでなく、足で踏みじめることを教えるようなものだ。」¹³

ミルワード牧師は自分が酒が飲めるという喜びがあるだけで、このような俗物根性を丸出しにする極めて偽善的な牧師である。しかし彼が偽善的か否かは別として、聖職者の発言である以上、一般の人々の物の考え方は推して知るべしであると言えるであろう。それほどまでに当代は道徳的な社会規範に公正さを欠く場合が多くあったことが察せられる。ミルワード牧師をこのように偽善的に仕立て上げることによって作者の社会批判の諷刺を見て取ることは当然可能であるが、兄ブランウエルを墮落させ挫折させた原因の一つを牧師であった父パトリックの教育にあったと考えることができる。ミルワード牧師は作者にとってはもっと身近な形での、父パトリックへの抗議として描き出された人物像であった可能性があるだろう。父の教育への批判であったと言えるだろう。ブランウエルはしばしばハウースの居酒屋 Black Bull の常連であり、今日もこのパブの片隅には彼がいつも座っていた椅子が残されていることによってもそのことが窺える。ギaskell夫人によれば、このパブでは旅人が一人ぼっちで退屈している時に、賢くて話し上手な若者としてハウースでは知らぬものはないブランウエルを呼び、彼を客に付き合わせていた。¹⁴ブロンテ氏がそのようなことで息子が呼び出されることに反対していたかどうかは不明にしても、ミルワード牧師の飲酒に対する考え方自体、ブロンテ氏の考えの反映であるとするのは、仮に誇張があるにしてもかなり可能性があるかと推察される。筆者はハウースを幾度も訪れる機会がある中で、ブロンテ一家の住んだ牧師館とこのパブとはほんの数百メートルの距離しかないことを確認しているが、その間には墓地と教会しかなく、教会を一步出

¹¹ibid., Ch. 3.

¹²ibid., Ch. 3.

¹³ibid., Ch. 4.

¹⁴Mrs. Gaskell, op. cit., p. 87.

て道を渡ればこのパブという近い距離でしかない。仮にブロンテ氏が息子が呼び出されアルコールを飲みながら相手をしなければならぬことが気掛かりであったならば、いつ何時にもそのような状況をやめさせるために足を運ぶことなど何の困難もなかった筈である。筆者にはブロンテ氏がこのような状況をむしろ容認していたとしか言いようがないように思われる。ついでながらこのパブから道を渡れば、すぐそこに彼がアヘンをもとめていたという建物も現存する。このハウースの街は今日も当時のままの姿をとどめていることを思えば、このヨークシアの周囲を荒野に囲まれたこの石畳の小さな街の僅か数百メートル四方の範囲内の中でブランウエルが自暴自棄になっていくのをブロンテ氏がどうして制することができなかつたのか、そのことが理解し難いほどに思えるのである。Black Bullはハウースの急勾配の石畳の坂道を上りつめた左側の角にあり、そこから振り返るとヨークシアの荒野の丘陵がその正面、下方に広がっている。

アン・ブロンテは彼女の人生経験に基づく観察によって蓄積した題材を用いて、人間性に潜む行動原理を彼女の道徳的規範に照らしながら忠実かつ誠実に描き出した。人間の理性は人間の本能をいかに抑え難いものであるかを提示したのである。彼女は当代の社会的因襲に対する批判の精神によって、臆することなく自らの信ずる所を述べて、そこに社会批評家としての確固たる一面を作家としての存在の中に位置づけたと言うべきである。彼女は社会の慣習を受入れる中にも、激しい独立と高潔の精神、大きな勇気と不屈の意志があった。自らの孤独な葛藤の中で自立、教育尊重、自己改善、正義、不正に対する憤りとそれに対する抗議の精神を培っていた。何よりも「自己の判断と良心をもって振舞う」という信念があった。このような男性に優るとも劣ることのない力強い精神性を備えた彼女の偽らざる資質を考えてみれば、もはや、“gentle Anne”といった呼称は似つかわしくもなければ、ふさわしくもないように思われる。彼女の伝記の中に、また姉シャーロットにはにかみ屋で遠慮がちな妹の姿が映っていたとしても、小説家としてのアンは少なくとも別人のように勇ましく敢然と社会に立ち向える改革者の姿であった。社会的諸種の問題に深く目覚めていたばかりでなく、社会の中における女性の地位への深い関心、男女の不平等の問題に対する批判と攻撃、当代の社会に多く是認されていた道徳観や、宗教上の永遠の地獄落ちの問題意識にも率直な批判の目を向けたのである。このようにして彼女は世の矛盾や不正を彼女の目で捉えたままに呈示し、そしてその悪を克服すべき手立てを示唆することを明らかにした。その教訓性こそアンの小説の目指すものであり、そこに独自の積極的な価値を見出せるものがある。ヴィクトリア朝中期にいち早くアンは女性の結婚及び家庭における地位に対しての抗議の旗手として自らの重要性を見出し、且つ神の裁きによる永遠の墮地獄という宗教主義に対し抗議した少数の作家の一人であったと定義してみることはあながち早計に過ぎはしないだろう。これは繰り返すに及ばず彼女が禁酒主義の主張を打出した小説家であることに加え、英国社会の中での家庭教師の身分と地位への弾劾者、英国中産階級の俗物性と偽善性の告発者としてなど、英国の社会体制の根幹に係わるいくつかの点についての改革的思想家であったことが注目されるべきである。

アンはとかく姉のシャーロットやエミリの陰に隠れているとみられがちであり、姉二人が対照的に比較の対象として見られることに比べ彼女には注目の度合いが薄れている。しかし彼女の作家としての上のような資質を考える時、姉たちとの対比も無駄ではない。結

論的にはアンの作品はシャーロットの作品と女性の自立の尊重、家庭教師としての実体験に基づく作品のテーマの選択といった点に共通性を見出せる。『アグネス・グレイ』の家庭教師の体験は『教授』の中の主人公ウイリアム・クリムズワースの中に同じ種類の教師としての体験という形として共通項があり、とりわけ経済的な活路を見出すことが常に差し迫った重大事であった点は、アグネスにもウイリアムにも最も基本的に言える共通性であった。それはシャーロットにもアンにも実人生において彼女たちがその実現を夢見ていた学校経営を果たすことで、経済的には言うまでもなく、社会的に虐げられていた女性の自立を護得したいとする願望がその創作意欲の根底に常に存在していたからに他ならない。しかしそのような外面的な願望もさることながら、ブロンテの姉妹たちには三者三様に当代の体制やその矛盾した理念への反骨心を備えていたことは繰返し述べるべき点である。要するに彼女たちは自分たちの生きている社会に無関心ではいらなかったのである。そして彼女たちは当代社会と人々とを、例えば、シャーロットが『シャーリー』の中で、描き出したようなラダイト運動と工場襲撃といった社会的大変動の直接的な現実の描写の中に映し出したのである。そうした現実の土台の上に立って人間のあるべき姿、生き方はいかにあるべきか、そして腐蝕し、むしばまれている人間性と社会とがいかに再生できるかについて、彼女たちなりの問題提起と解決法を提示したと言える。中でもエミリは社会的因襲を完全に無視したとも思える形での時代とその風潮の克服、いかなる時代精神をも超克した人間存在の根幹に肉迫した世界の創造を果たした点で特に傑出していた。

幼児期より父のブロンテ氏と共にいくつかの新聞を毎日読んでいた姉妹たちは社会の事象によく通じていてその悪弊を熟知していた。にも拘らず彼女たちは社会改革者としての使命感を持つといった外的な思考を抱くというよりも、彼女たちの内面の世界での私的改革者としての方向性を持っていたと言った方がより正確であろう。現実の実相と本来あるべき姿とはいかなるものかの二面を提示したと言えるであろう。エミリの小説ですらその強烈な印象のために因襲も倫理も道徳もないものと言うのは誤りであり、注意深く読めば、彼女が人物たちの行為を必ずしも是認しているとは言えないながら、言わば amoral な人物たちを十分に理解した上で創造したと言えることは忘れてはならない。彼女の世界にも十九世紀キリスト教社会の規範というものが一方にあり、それに照し合せて初めて、主人公たちへの価値判断、道徳的な倫理的な批判も意味をなすのである。エミリにもアン同様の意識が示し出されていることを見落としてはならない。一言で言えば、彼女は人間の放縦を社会的義務に優先させることによってもたらされる恐ろしい結末を、結局は刈り取らねばならないことを描くのであり、ヒースクリフが最終的にすべての復讐的行為を果し終えた後に、その目的のために手段を選ぶこともなかった行為のもたらした空しさを味合うのもその一例であるだろう。ここには明らかに『嵐が丘』の世界にも作者の moral value に対する尊重が認められるのである。従って彼女は人物たちの amorality を肯定し是認するというのではなしに、彼女の創造した amorality の実体は一種のレトリックとしてパラドックス的に彼女が実人生で信じる道徳的な規範を強調せんがためのものであったとする視点が可能である。従ってエミリの小説の世界は言わば神不在の世界と断じられることによって、社会の道徳的理性の統べるものとは無縁の心理的世界とすることが果たして妥当なことか異論の生じるところである。エミリの世界は道徳や倫理観の枠組での経験ではなく、感性のおもむくままの、純粋無垢の感情の世界にあり、読者の反応を意識することに

よって作品を生み出す形とは遠く隔たった、人間の「精神と肉体の両方を共に打ち破る情熱の力に対する畏怖の念への熟知と敬意と理解」¹⁵の世界である。作者の側の道徳的価値基準の問題は、あまりにもあからさまに提示することは極度に押さえられて、一見まったく存在しないかのように思われる点にこの作品の複雑性、不透明性も秘められていると言えるであろう。彼女の小説と詩の世界とが不可分な要素があることは認められているが、エミリの詩には明らかに教訓的な要素が認められるように思われることからすれば、エミリは小説の世界では、教訓性も道徳性も表面上浮び上らぬほど深く潜ませていると考えてよいかもしれない。

一方アンはむしろ読者を十分に意識し、読者の啓蒙こそを意を用いたのであり、そのためにこそ moral norm を前面に押し出しているのである。そこにエミリとの創作レベルでの決定的な差異がある。読者あればこそその道徳性であり教訓性であった。シャーロットの『ジェイン・エア』の世界にあっても、読者に語りかけ自らの主張に耳を傾けさせようとする姿勢は明らかであった。その意味では例えばディケンズの世界にそのもっと押し進められた例を認められるのに似ていないこともない。恵まれぬ孤児オリヴァー・ツイストの試練の人生とその運命に一喜一憂させられるのは、作者が完全に読者の心理的反応を十分に掌握して、その目的の方向へと導いていくからこそであり、明らかな勧善懲悪的な単純性に作者の諷刺的精神を十分に理解しながら読者も読み進むことができるのである。アンの場合にもそのように読者に対し、主人公たちを道徳的規範の導き手として提示したのである。教訓的であることがいかに読者に受入れられるかと言うよりも、教訓性によって読者を導かざるを得ないという実人生の切実な思いがすべての創作の推進力ともなり得たのである。

¹⁵W. A. Craik, *The Brontë Novels* (London: Methuen, 1968), p.10.